

日本から中国に渡った『エミール』

—中島端蔵による漢訳『愛美耳鈔』（1903年）の舞台裏—

坂倉裕治

はじめに

アジア地域の近代化＝西洋化の過程にあつて、哲学、政治、経済、教育などにかかわる西洋の古典作品が翻訳紹介されるにあたっては、直接的に、あるいは間接的に、日本の知識人が果たした役割が無視しえない。清からの日本への公式な留学は、1896年に駐日公使裕庚が外務大臣と文部大臣を兼務していた西園寺公望に願い出たのを受けて、東京高等師範学校長の加納治五郎¹⁾が13名の留学生と1名の補欠留学生を受け入れたのに始まり、19世紀末から20世紀初頭にかけてその数が激増した。ほぼ時を同じくして、夥しい量の文献が日本語から中国語に翻訳された。そこには、西洋の古典作品を日本語訳から重訳したものも数多く含まれている。いわゆる「西学東遊」が隆盛をきわめた時代である²⁾。ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) の作品についても、『社会契約論』、『エミール』、『告白』の最初期の中国語訳は、いずれも日本語訳からの重訳や日本の知識人による漢訳 (古典中国語訳) であった。本稿では、『エミール』の中国語初訳となった漢訳が、どのような歴史的な文脈のなかで成立したのかを検証することを通じて、アジア地域における『エミール』の受容・翻訳史研究に認められる空白を埋めるための準備作業としたい。

1. 日本語訳から漢文に重訳された『エミール』とその訳者

『エミール』は日本人による二重の仲介を経て中国に紹介された。すなわち、山口小太郎 (1867-1917) と島崎恒五郎 (生没年不詳) による日本語抄訳³⁾を中島端蔵^{たんざう} (1859-1924) が漢訳したもの⁴⁾が、多くの欠落を有する不完全なものだったとはいえ、中国語初訳として、古典中国語を読むことのできたアジア地域の知識人たちに、『エミール』に触れるための扉を開いたのである。

1920年代に出版された『エミール』の日本語全訳に先立って現れた三点の日本語抄訳のなかで二番目の訳業となる山口らの訳業は、訳出する箇所を原則として米国の教育学者ペイン (William Harold Payne, 1836-1907) による英語抄訳⁵⁾にしたがいながらも、デンハルト (Hermann Denhardt, ?-?) のドイツ語訳 (レクラム文庫)⁶⁾をも参照しており、両者の文意が異なる場合はドイツ語訳にしたがったと明記している。ペインが部分的にしか訳出していない段落について欠落部分をドイツ語全訳によって補うなど、件数は少ないものの修正を加えており、ペインの不適切訳を改めている箇所も随所に認められる。とはいえ、全体として見れば、ペインの英語抄訳をおおむね逐語訳したものと

見ることができる⁷⁾。先行する菅學應(緑蔭, 1868-1932)の抄訳(1897, 1902年)⁸⁾、続く三浦關造(1883-1960)の抄訳(1913年)⁹⁾が、翻訳の底本には必ずしも忠実ではない、夥しい量の省略や敷衍が施された、ほとんど自由訳といってよいものだったのに比して、訳者の意図的な取捨選択や付け足しなどが認められず、きわだった特徴がないことが特徴といえる訳業である。

山口らの『エミール抄』を漢訳した中島端蔵は、通称を端^{たん}、号を斗南^{となん}とし、勿堂^{ぶつどう}や復堂の別号を用いた漢学者である。私信ではひらがなで「まさし」と署名することもあった。「端正」の「正」を訓読みした言葉遊びであるらしい。「江戸の五鬼」の一人に挙げられる亀田鵬斎(1752-1826)門流の漢学者、撫山と号する中島慶太郎(1829-1911)の次男として生まれた。幼少期より病弱で、そのために学業も中途半端になったという。兄弟には、やはり漢学者となった腹違いの兄、綽軒^{しゃくけん}と号す靖次郎(1852-1906)、玉振または蟬山と号す弟、竦之助(1861-1940)などがある。竦之助は通称を竦^{しやう}といい、私信では「たかし」と署名することがあった。竦之助が上州玉村(現在の群馬県玉村町)に開いた私塾、玉振学舎は、森鷗外(1862-1922)の小説『羽鳥千尋』の舞台となっている。末弟の比多吉(1876-1948)は、東京外国語学校支那科を卒業、1901年に東京専門学校(早稲田大学の前身)講師として中国語を教えた後、1902年、近代的な警察制度整備のために保定に設立された警務学堂で教えるべく清に渡り、1908年には官僚となって紫禁城に入った。満州国の「建国」にもかかわり、溥儀の側近として高級官僚となった。また、唐代の伝奇『人虎伝』に依った『山月記』(1942)などで知られる小説家の中島敦(1909-42)は、1889年に文部省教員検定試験漢学科に合格して旧制中学で漢文を教えていた、慶太郎の六男、田人^{たびと}(1874-1945)の長男で、端蔵の甥にあたる¹⁰⁾。敦の初期の短編『斗南先生』には端蔵の人柄が生き生きと描かれている。職につかずに日々古典籍と戯れ、母に生活費の無心をくりかえす姿を見ながら成長した淳は、端蔵に好感が持てなかったらしい¹¹⁾。

中島端蔵が残した著書を簡単に見ておこう。肌香夢史^{はだかむし}の筆名による『野路之村雨一政事小説』(岩崎茂兵衛, 1888)の主人公は1887(明治20)年に施行された「保安条例」に抗う青年で、同志に助けられてアメリカに留学するまでに育まれる友情が描かれている。中島は、政治や外交に強い関心を持っていたらしい。1889年には、中島は政治団体、无邪志會^{むさしかい}を立ちあげており、その設立主旨文書が残っている(『无邪志會立會緒言』无邪志會, 1890年)。『近世外交史』(岡安平九郎/幸玉堂, 1891)の上篇では、浦賀に米国の軍艦が入って以来の、日本の「屈辱外交」を辿り、下篇では、外交を兵備、学術、言語、経済との関係で論じて、立国の道筋を説いている。『支那分割の運命』(政教社, 1912年)では、西洋列強の野心にさらされ、植民地とされる危機に直面していた中国の状況は他人事ではなく、日本の運命にもかかわる重大事であるという。列強による中国の分割に参加することも、参加しないことも、どちらも日本に不利益をもたらすとはいえ、分割に参加して白人による「黄人」の支配に加担してはならず、日本人の徳(国力)をもって白人をアジアから追放し、「黄人」を救う「日本帝國民の覺悟」を促した(303-315頁)¹²⁾。

中島端蔵による『エミール』の漢訳『愛美耳鈔』は、まず、中国初教育専門誌『教育世界』に連載された。同誌の各号は、中国の知識人による教育論説を取り上げた「文篇」(その主な論点は、科

挙の弊害を問う廃止論、近代的初等教育学校の創設と普及、教育行政制度の整備であった）、日本語の文書を中国語に訳出した「譯篇」からなっていた。同誌に掲載されて完結した記事の主だったものはまとめられ、「教育叢書」として刊行された。この叢書の国内所蔵は、管見に触れた限りでは、京都大学の1～7集全82冊、一橋大学の1～5集全53冊がある。筆者が直接確認できた一橋大学所蔵本では、初集の函に「光緒辛丑」（1901年）とあるほかは、各冊子に発行年の記載がない。『教育世界』に掲載された『愛美耳鈔』について、筆者が現物を確認できたのは、北京大学図書館所蔵の第53号（癸卯閏五月上〔1903年7月〕）、第56号（癸卯六月下〔1903年8月〕）、第57号（癸卯七月上〔1903年8月〕）のみである。同誌掲載の記事は、後に叢書として刊行することを見込んでか、記事ごとにそれぞれ通しの丁付けが施されていた。第53号の訳文は「二十」の丁付けで終わっており、第56号のそれは「八十一」で始まっている。したがって、所蔵先不明の第54号、第55号にも訳文が掲載されていた可能性がある。さらに注目されるのは、第56号、第57号に掲載の訳文が、先行する記事に続いて文章の途中から表題もなしに唐突に始まっており、丁の中央に記された「愛美耳鈔」というタイトルによって記事が変わったことを知ることができるのみとなっていることである。「教育叢書」の第3集第3冊および第4冊として出版された『愛美耳鈔』の本文、丁付けは『教育世界』のものと一致する。つまり、後に叢書として記事毎にまとめることを前提として版が組まれ、適当に量を区切って雑誌に連載するという手法がとられていたのだと推測される。

「教育叢書」の第3集第6冊として、ヘルバルト学派に関する二次文献¹³⁾も中島によって漢訳されている。その底本は、『エミール抄』の訳者でもある島崎恒五郎の手になる日本語訳であった¹⁴⁾。やはり、『教育世界』の、第61号（癸卯閏九月上〔1903年10月〕）、第62号（癸卯九月下〔1903年11月〕）、第63号（癸卯十月上〔1903年11月〕）、第64号（癸卯十月下〔1903年12月〕）に連載された記事をまとめたもので、『教育世界』と「教育叢書」で同一の版が使い回されている。

『愛美耳鈔』の訳文、内容にかかわる問題点を詳細に検討することは別の機会に譲り、ここでは、いくつかの一般的な特徴について整理しておくにとどめたい。この訳業では、底本である山口らの訳書の巻頭に掲げられた訳者による「緒言」（翻訳の底本や参考書目、翻訳の方針が示されている）が省略されているものの、それに続いて本文に先立って置かれていた英訳者ペインの「諸言」と、本文の後に、巻末に付録として、ドイツ語の教育事典の項目「ルソー」を抜粋して訳出した「略評」（ルソーの略伝と『エミール』評）もあわせて訳出されている。後者については、「盧騷畧傳及愛美耳評論」のタイトルに続けて、「摘譯林度渥耳教育事彙」と、中島の漢訳では省略された巻頭の「重訳者の緒言」に見える「オーストリアのリンド子ルの『教育事彙』より」とある情報を補っている。

中島の漢訳では底本にある段落分けと異なり、前後2～3段落が1段落となっている箇所がある。逆に、底本では一つの段落を二つに分けている箇所もある。今日の批判版と比較すれば直ちに目に見いだされる夥しい欠落部分の多くは、底本に、すなわち、訳出箇所を原則としてペインの英語抄訳にならった山口らの訳業に由来する。それに加えて、山口らの訳本には存在する文章の一部が中島訳で欠落している。参考までに一例を示しておこう。

山口：「青年となるまでの人生は専、弱き時なり、然れども体力の増加はやうやく需要の増加に超ゆるものから、發育せる動物、生活の此初期の間に於いて絶對的には猶、甚弱けれども、さすがに比較的には強き者とぞなる。さしあたり其力は發達の末、全からざる需要を満たすに足り、大人としては甚弱けれども小兒としては甚強し、人の弱きは何によりてなりや、これは其力と欲望との平均せざるによりてなり、抑、我等を弱くするものは偏情ぞかし、偏情を満すには自然より授かりし力のみにては足らず、故に其欲望を減ずは力を増すに等し、欲望に超ゆる力をもてるものは、何程か餘りの力をもてる者なれば、とにかくもいみじう強き者とこそいふべけれ、これ小兒期の第三段階なり、いまより之につきて述べん」（174-175 頁）。

中島：「人之未達青年也、為其最孱弱之時、然而體力益加、較昔需要為多、以為大人而視之、則又甚強、夫人之所以弱者何、以其力未能與其所欲相稱也、吾欲無限、而吾力有限、以有限之力、應無限之欲、夫亦難矣、能殺其欲者、即增其力者也、吾力之超於吾欲、是即小兒之強有力者也、是為小兒期第三階級、今請說之」（第3冊、52 丁左～53 丁右）。

下線部が中島訳では訳出されていない部分である。まれではあるが、底本にある段落全体をまるまる訳出していない例もある。また、さらに数は少ないものの、底本にない語句が中島訳で加わっている箇所も認められる。全体として、自由訳というほどではないものの、底本と比して欠落がそこかしこに認められる不完全な訳業である。中島訳で訳出されていない箇所が、訳者によるなんらかの判断による自覺的なものだったのか否かを論じうる材料は、筆者の検討では見いだせなかった。

中国の古典に目が向いていた中島端蔵が西洋教育思想に関わる書物2点を漢訳したのは、なぜだろうか。筆者の調査では決定的な証言、資料は発見できなかったものの、以下に示す状況証拠に鑑みて、羅振玉（雪堂、1866-1940）の依頼に応じたものだと考えるのが妥当であると考えられる。こんにち、羅は甲骨学研究の基礎を築いた学者として知られている。1911年に辛亥革命が起ると、これを避けて日本に渡り、旧知の内藤虎次郎（湖南、1866-1934）らを頼って京都に滞在した。1919年に帰国し、天津で清の最後の皇帝（宣統帝）であった愛新覺羅溥儀（1906-67）の教育係となった。1932年に満州国が成立すると、参議府参議、監察院長を歴任した¹⁵⁾。

中島端蔵は中国にも頻繁に赴き、羅振玉や汪康年（1860-1911）などと交流があった。端蔵の没後、漢詩集、中島勿堂『斗南存藁』（中島竦編、文求堂書店、1932年）が弟の竦之助によってまとめられた。自費出版して帝国大学に寄贈したとする中島敦の『斗南先生』末尾の記述のとおり、原本は現在、東京大学と京都大学に所蔵されている。その巻頭には羅振玉が序を寄せており、中島との出会いと親交を回顧している。「斗南存藁序」については、村山吉廣の中島敦研究の巻末に、資料として原文とともに読みくだし文、口語訳、注釈が収められており、貴重な原本に容易に触れ得ない読者にとって、有益である。これによれば、上海で中島は羅の家的一年ほど居候したことがある。ある日、突然、羅の家を訪ねた中島は、筆談でアジアをとりまく政治情勢について持論を展開したのち、3年程中国に

滞在する予定なので、やっかいになりたいと申し出た。「僕有三寸弱豪、不素餐也」(僕に三寸の弱豪あり、素餐せず/いささか文筆の心得があるので、それなりの働きはさせていただく)という中島に、羅は「請迓訳東文書籍」(東文の書籍を迓訳せんことを請ふ/日本文献の翻訳を依頼することにした)と応じた。残念ながら、「斗南存稟序」には羅が翻訳を依頼した書物を特定しうる情報はなにも記されていない。その後、羅が江蘇師範學堂の責任者となると、中島はその学校で教えたいと申し出た。羅はこれを許したが、数カ月で辞任したという¹⁶⁾。

羅が新設の江蘇師範學堂総督に任命されたのは1904(光緒30)年11月であった。同學堂は1912年に江蘇省立第一師範学校となり、1927年に蘇州中学に改組、現在にいたっている¹⁷⁾。現行の中国の学校教育制度において、「中学」は日本の中学校および高等学校に相当する中等教育機関である。江蘇師範學堂の校地は、11世紀に設置された府学に遡る、科挙をめざす若者たちが学んだ儒学学校から引き継いだもので、蘇州市旧市街のほぼ中心に位置している。多くの歴史的建造物が現存しており、そのうちの一棟が府学時代からの長い学校史を展示紹介する資料館となっている。江蘇師範學堂の最初期について紹介するパネルに見える教員一覧表には、「中島端、翻訳官、俸給150元」と記されており、「斗南存稟序」の記述のとおり、この学校に中島がかかわった形跡が残されている。

羅振玉は教育とならんで農業にも強い関心を寄せた。日清戦争後の経済的困難に直面して、農業の「近代化」による国力の増進を願って、羅は學農社(務農会)を設立し、1897年4月に専門誌『農學報』を創刊した。同年末までは月に2号ずつ、以後は月に3号ずつ発行され、1905年12月の廃刊までに315号を発行した。欧米と日本の農業書の翻訳を中心に、中国での実践に基づく農学書や、中国に伝わる古い関連文献も掲載した。翌年には、東文(日本文)を翻訳できる人材を育てるべく、中国初となる日本語学校、東文學社を上海に開学した¹⁸⁾。『農學報』に掲載された翻訳記事は農學叢書(上海農學會譯、全7集82冊)としてまとめられた。第二集に光緒庚子(1900年)、第三集に光緒辛丑(1901年)とあるほかは出版年記載がない¹⁹⁾。中島は、第七集第73、74冊に収められた、草野正行、中村春生撰『農学校用氣候教科書』、澤村眞撰『農藝化學實驗法』の2点を漢訳している。

以上、必ずしも関心を寄せていたようには見えない『エミール』とヘルバルト論、農業関係の教材2点、合計4点の書物を、中島が日本語から漢訳したのは²⁰⁾、羅振玉の要請に応じたもので、異国での滞在費を賄うための手段にはかならなかったのだ、と推測される。

2. 中国における教育の「近代化」と日本人教習

中島による『エミール』の漢訳は、中国の教育の近代化、すなわち西洋化の過程で、日本と中国の間で結ばれた緊密な交流という歴史的な文脈の中に位置づく訳業である。両江総督、劉坤一(1830-1902)は、西洋列強の圧迫から国を救うべく変法策を唱えた。すなわち、政治変革を担う人材を養成するために教育制度を改め、優れた若者を外国に留学させ、西洋に、また、いち早く西洋の文化と教育を取り入れていた日本に学ぶよう、奨励した。劉が1902年に朝廷に奏上した「議複新政第一折」では、日本の教育方法が優れていること、中国と日本では用いる文字が近く、日本に留学生を送れば

短期間のうちに少ない経費で効率的に学ぶことができる、と主張していた。蘇州には、アメリカのメソジスト派が設置した東呉大学堂があったものの、清末から民国初期に盛んであった反キリスト教運動を背景として、江蘇学務局が同大学堂で教員資格を得た卒業生を教員として採用することに消極的であったことも、蘇州における教育の近代化に日本から招聘された教習たちが特段の影響力を持った理由とされる²¹⁾。同年、劉が志半ばで急死すると、その思いを引き継いだのは、両江総督を兼務することとなった湖廣総督の張之洞(1837-1909)²²⁾である。

これに先立って1900年、張に求められて湖北農務局総理兼農務学堂監督に就任していた羅振玉は、「国民之資格」を養い「国民之知識」を広める「普通之教育」(初等教育)に関心を寄せていた。すなわち、科挙を通じて有為な官僚の養成・選抜を行った伝統的な教育を排し、西洋や日本にならって教育を「近代化」すること、国家全体に統一的な教育体系を整えて国民全体を啓発すること、そのために多くの近代的な学校(学堂)を設置することが必要である、と唱えたのである。周知のとおり、科挙は、隋代から清代に至る1300年余の期間、中国(中原)で採られた官吏登用試験であり、そのめあては、官職の世襲化を避け、真に能力の高い人材を登用することにあった。しかし、明、清代には応募者があまりに多くなったため、指定された儒学学校で学んだうえで数度に渡る予備試験を通過した者だけが本試験に臨めるという形をとった。ヨーロッパでは、イエズス会士たちがもたらした情報に基づいて、ヴォルテールのように科挙を公平な人材登用法として高く評価する著述家もあったものの、中国においてはその弊害を断罪し、廃止を唱える者も少なくなかった。幾重にも渡る複雑な予備試験の途中で失敗、挫折した有能な若者たちが不満を募らせており、なかには、唐末の黄巢(?-884)、清代に太平天国を興した洪秀全(1814-64)のように、反体制運動の指導者となる者もあった。また、科挙で問われたのがほとんどもっぱら古典の知識だったため、新思想の出現や近代化の妨げになったという側面も指摘される。19世紀以来、西洋の近代的軍事力を前にして中国伝統文化の無力さが唱えられるようになり、西洋式の学校教育をもって科挙に替えようという議論も盛んとなり、1904(光緒30)年の実施を最後に、科挙は廃止となった。

1901年12月から翌年1月にかけて、張之洞と劉坤一によって日本に派遣された羅振玉は、日本の教育事情の把握と関連書籍の収集を命じられていた²³⁾。日本に派遣されるに先立って、同年5月に羅が上海で創刊した雑誌『教育世界』は、毎月2号ずつ発行され、1908年1月の廃刊までに166号を発行した。世界各国の新しい教育学説、教育制度、教育法規(文部省令、学制、小学校令、中学校令、師範学校令、帝国大学令、実業学校令、各種学校規則、高等師範学校規程、高等女学校令、私立学校令など)、教育課程、師範学校用・小学校用の教科書などを翻訳して編集したもので、いち早く西洋に学んでいた日本の教育制度、教員養成制度を理解しようという熱意が読み取れる。翻訳には、東文學社に学んだ王国維らとならんで日本の知識人たちの協力もあった。なお、「農學叢書」を出版するために負った羅の負債を弁済したのは、羅を上海から湖北に迎えて、農業行政、教育を任せた張之洞だった。また、張は劉坤一とともに、『教育世界』の創刊も支援した²⁴⁾。

中国における農業と教育の近代化という課題に、日本から招聘された知識人たちが果たした役割は

小さくない。1904（明治 37）年の日本の外務省政務局「清国官庁雇聘本邦人一覧」には、「中島端」の名とともに、この時期に江蘇師範学堂で教えた日本人教習の名が記されている。蘇州中学資料館のパネル（軽微な転記ミスが認められる）で紹介されているものと基本的に同一である。

（教習名）	（俸給）	（職名）	（備考）	（招用期間）
藤田 豊八	400 元	顧問官・総教習	文学士	明治 37 年 8 月～
岡 真三	300	博物学教習	理学士	明治 37 年 11 月～40 年 10 月
林 信吾	300	理科・数学教習	理学士	同上
小倉 孝治	200	博物学教習	理学士	同上
中島 端	150	翻訳官		同上
村井熊之助	130	画学教習		同上
巽 健雄	120	数学教習		同上
中村信三郎	120	日本語教習		同上
高田 九郎	60	体操教習	東京府師範	同上
田岡佐代治		翻訳官・教育学教習	文学士	明治 38 年 5 月～

中島と田岡は江蘇学務局翻訳官を兼任しており、その職名が記されている。実際に江蘇師範学堂の教壇に中島が立ったのか否か、立ったとすれば何を教えたのかを示す確たる資料は発見できなかった。翻訳官として、『教育世界』に掲載された日本の教育関連法規のいくつかも中島が無署名で漢訳していたらしい。しかし、こんにち、それらを同定することはきわめて困難である²⁵⁾。

江蘇師範学堂に招聘された日本人教習たちのなかでも、特に重要な役割を演じたのは藤田豊八（1869-1929）である。阿波国美馬郡郡里村（現在の徳島県美馬市）に生まれ、徳島中学校、第三高等学校（京都）を経て、1895 年に帝国大学文科漢文科を卒業。東京専門学校（早稲田大学の前身）や哲学館（東洋大学の前身）で中国文学史を講じるかたわら、1896 年、小柳司気太（1870-1940）、田岡佐代治（嶺雲、1870-1912）らとともに、東亜学院を創立し、雑誌『江湖文学』を創刊した。羅振玉が率いる上海農学会の招聘を受けて上海に渡り、雑誌『農學報』で東文（日本語書籍）からの翻訳を担当した。東文學社の設立にもかわり、教習として教えた。雑誌『教育世界』の編集顧問もつとめた。1904 年、広州で教育事業に協力し、江蘇学務局顧問官となった。蘇州で江蘇師範学堂の設立にもかかわり、総教習（教頭に相当）に就任した。1909 年、京師大学堂（北京大学の前身）農科教習として招聘され、江蘇省を去った。1912 年、羅振玉、王国維をともなって帰国、在野の学者として東洋史を研究した。1923 年に早稲田大学、1925 年に東京帝国大学、1928 年に台北帝国大学で教授職に就いた。著書に、『中等教育東洋史』、『東西交渉史の研究』などがある。漢籍 1700 点余りの蔵書は、没後、東洋文庫に寄贈され、「藤田文庫」として活用されている。

羅は王国維に江蘇学務局翻訳官を兼務させ、藤田とともに、日本を範とした教育の近代化＝西洋化

に向けて、明治以降の日本の教育制度(明治5年の学制, 明治12年の教育令, 初等・中等教育課程(明治19年の学校令), 高等教育機関のあり方などに係わる文書を勢力的に翻訳させ、雑誌『教育世界』で紹介するとともに、日本の学制をモデルとした教育機関の整備を提案した。その概要は以下の通り。北京に大学堂を設置。各省を一大学区として、それぞれに高等師範学堂, 高等農工学堂, 外国語学堂を設置。府州県(省を構成する行政単位)にはそれぞれ、師範学堂を設置。州県に小学堂, 女子尋常小学堂, 高等小学堂を設置。小学堂は、徳育と国民教育の基礎、人生必須の知識技能の習得をめざす場とされ、修身と国語の教材は儒教に求められた。また、寺子屋で教えていた教師の短期再教育による近代的学校教員の養成という日本の手法がおおいに参考にされた。普通教育(初等教育)を担う小学堂教員の早期養成という課題に対する対応として、まずはじめに師範学堂が整備されたゆえんである²⁶⁾。もっとも、日本流の教員速成方法が、師範学堂に学ぶ生員たち(再教育を受ける現職教員たち)からは必ずしも支持されたわけではない。軍隊をモデルとした寄宿舎制、入浴や食事といった生活の細々とした点まで規則によって管理する方針に抗して、1906年には、日本人教習を攻撃する匿名の文書が江蘇師範学堂内で配布されたのをきっかけとして、生員たちの不満が爆発した。この騒動は羅振玉が高圧的に鎮圧した²⁷⁾。同年2月、羅が学部(文部省に相当)視学官に転出すると、後任の王旭莊は藤田の協力を得て、同学堂を優級師範学堂(中学堂、師範学堂の教員養成機関)に改組した²⁸⁾。1909年には、羅は京師大学堂農科監督に就任している。

科举廃止を翌年に控えた1904年初頭、藤田は羅振玉、王国維に対し、『教育世界』に訳出する文献の力点を、教育法規、教育制度にかかわるものから教育理論、教育思想にかかわるものへと移すことを進言した。これを受けて、同誌の編集方針が改められた。また、同誌の編集も王国維が中心となって担うことになった。第70号(光緒言30年正月下旬[1904年3月])の巻頭には、「日本文学士藤田豊八君」として肖像が掲げられ、中国の教育改革に果たした役割が讃えられている。同誌に掲載される記事は、西洋に学んだ日本の教育制度、関係法規から、教育思想、教育理論に重点が移され、さらには、哲学、心理学、倫理学、美学、文学の領域にわたる人物の評伝、紹介記事が中心となって、教育問題に限定されない総合的な人文学雑誌となっていった。すなわち、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、ヒューム、スピノザ、ホッブズ、ロック、モンテーニュ、スペンサー、コメニウス、ペスタロッチ、フレーベル、ヘルバルト、カント、ニーチェ、ショウペンハウアー、シェークスピアなどの略伝が紹介されるとともに、『フランクリン自伝』(『美国佛蘭克林自傳』, 69-75号)、ペスタロッチの『リーンハルトとゲルトルート』(『醉人妻』, 97-116号)、ロックの『知性指導論』(『悟性指導論』, 145-165号)などが訳出された。

中島による『愛美耳鈔』やヘルバルト論の翻訳は、『教育世界』の編集方針の転換を先取りするものであったと考えてよいだろう。中島の『愛美耳鈔』に先立って掲載された思想書の翻訳としては、第46号(1903年3月)から第50号(同年6月)に連載されたサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles, 1812-1904)の『自助論』(*Self-Help*, 斯邁爾斯『自助論』中村正直譯, 中村大来重譯)を認めるのみである。清末の教育の近代化=西洋化の先端地域だった江蘇省を舞台に、教育の近代化=西洋

化を推進した人たちの関心の焦点が制度や法規から思想へと転換していく時期に現れた中島の『愛美耳鈔』は、雑誌『教育世界』に掲載された記事のなかにあって実に興味深い位置を占めていた²⁹⁾。

おわりに

1903 年の中島による『愛美耳鈔』に続いて、1915 年 11 月～12 月、翌年 3 月～6 月には、ペインの英語抄訳の一部分を訳したとみられる、譚覚明（生没年不詳）の抄訳『教育臆説、一名愛美兒』が『湖南教育雑誌』に連載された。初回にはペインの序文のごく一部分を抄訳した「美國威廉畢仁序言」が掲載され、訳文は第一編までで未完のまま終わっている。訳文の他に、随所に訳者による解説が付された「訳解」である。1923 年には、魏肇基（生没年不詳）による『愛彌兒』（上海、商務印書館、中華民國 12 年、全 3 冊）が刊行された³⁰⁾。魏は西田幾太郎の『善の研究』から強い影響を受けて、これを翻訳しており（『善之研究』、開明書店、1929 年）、哲学に関心が強かった。中島の『愛美耳鈔』は教育を題材とした新しいタイプの小説として読まれ、教育理論として学術的な観点から『エミール』が読まれるようになったのは魏の訳業以後のことのようである³¹⁾。初期の翻訳と、いくつかの紹介文を通じて、『エミール』は中国において、民主主義と民権を踏まえた新たな具体的な教育方法を示した指南書として、あるいは教育を理論的に論じた書として読まれるとともに、女性の自立を求める人たちにも影響を及ぼしたようである³²⁾。ルソーの没後 200 年に当たる 1978 年には、フランス文学者、李平沅（1924-2016）によるフランス語原文からの全訳、『愛弥儿，论教育』（北京、商务印书馆、全 2 冊）が刊行され、決定版として版を重ね、読み継がれている。

日本および中国で『エミール』が翻訳、紹介され始めた当初の様子を伺ってみると、同じ著者による『社会契約論』の場合とは対照的な特徴が認められるように思われる。『社会契約論』の初期翻訳を繙いてみれば、いずれも、西洋列強による植民地支配に屈しない、独立した近代国家建設のための手がかりを探ろうという訳者たちの熱意がはっきり見てとれる³³⁾。フランス語原文にせよ、英訳にせよ、翻訳の底本と真剣に向き合って格闘した形跡が認められる。これに対して、中島の漢訳にも、その底本となった山口らの訳業にも、訳者たちがなんらかの切実な課題意識をもってテキストと向き合い、翻訳に臨んだ痕跡を見いだすことが難しい。報酬を得るための仕事として最小限の手間暇で訳したものにすぎない、と推測される。こうした不完全な翻訳を拠り所に、近代化＝西洋化された教育に関心を持ったアジア地域の人々のもとで『エミール』が辿ることになる運命は、おそらくは、原著者ルソーがまったく望まなかった類のものであったにちがいない³⁴⁾。しばしば原著者の意図を裏切る初期翻訳は、受け取る側が何を求め、何を望まなかったのか、といった問題に接近するための有力な手がかりを与えてくれるかもしれない点で、興味深いテキストだということができる。

〔付記〕本研究をこのような形で一応の形にまとめるまでに、2013 年度、早稲田大学特定研究 A による助成（課題番号 2013 A-845）を受け、2018 年度には特別研究期間制度の適用により、時間的に余裕のある形で中国での調査が実現した。本稿の主要部分については、2014 年 11 月 5 日、パリ・ディド

ロ大学東アジア言語文明学部中国学科において講演する機会を与えられ、同学科の王晓荅（セリヌ・ワン）准教授をはじめ中国語を母語とする研究者たちと漢字での筆談を交えたフランス語で意見を交換することができた。2012年のルソー生誕300年を控えて2010年秋にタンギー・ラミノ氏（元フランス国立学術研究センター上席研究員）の呼びかけで発足した国際的研究グループ「アジアにおけるルソー」の枠組みのなかで着手された研究であり、もう少し早くまとめる予定であったものが諸般の事情で延び延びになってしまった。本稿の準備にあたって、雑誌『教育世界』は北京大学図書館（上海図書館所蔵本は保存状態が極めて悪いために閲覧許可が得られず、現存する号数の確認もできなかった）で、「教育叢書」は一橋大学附属図書館と中国国家図書館（北京）で閲覧することが許された。一橋大学所蔵本は全体として保存状態が良好であったものの、『愛美耳鈔』については破損によって判読できない部分が2箇所あり、中国国家図書館所蔵本によってこれを補うことができた。北京での調査にあたっては北京大学国際合作部の、上海では任友慧氏（早稲田大学大学院教育学研究科学校教育学専攻修士課程修了）の支援を受けた。また、蘇州中学を訪問した折には、突然であったにもかかわらず、同校英語科の袁振江氏が英語で懇切丁寧な説明を加えながら校地、特に資料館を案内下さり、質問にも親切にお答えいただいた。会話のなかで、同校が早稲田大学本庄高等学院の協定校であることを知り、奇縁を感じた。作家、中島敦を例外として、すっかり忘れ去られていた中島一家の足跡を再発見した功績は、長く早稲田大学文学部で教鞭をとられた村山吉廣名誉教授に帰せられるべきものであり、関係する資料が多数、早稲田大学図書館に所蔵されていたのは幸いだった。中国語資料の探索、収集、整理については、元早稲田大学教育・総合科学学術院助手の姜華氏と趙倩倩氏の助力を得た。この場を借りて、関係各位に謝意を表明したい。

註

- 1) 楊曉，田正平「清末留日学制教育の先駆者加納治五郎」，大里浩秋，孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』お茶の水書房，2002年，3～28頁，参照。
- 2) 次を参照。實藤惠秀『支那譯の日本書籍目録』財団法人日中華學會，1933年10月。同『中譯日文書目録』國際文化振興會，1945年。同『中国人日本留学史』くろしお出版，1960年。同『中国留学生史談』第一書房，1981年。阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版，1990年。巖安生『日本留学精神史』岩波書店，1991年。黄福慶「清末に於ける留日学生派遣政策の成立とその展開」『私学雑誌』東京大学史学会，第81編第7号，1972年。同「清末に於ける留日学生の特質と派遣政策の問題点」，『東洋学報』東洋協会調査部，第54巻第4号，1972年。同『清末留日学生』中央研究院近代史研究所，1983年。酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触』ひつじ書房，2010年。酒井順一郎『改革開放の申し子たち』冬至書房，2012年。
- 3) ジャン・ジャック・ルソー著『エミール抄』山口小太郎，島崎恒五郎譯，開發社，1899（明治32）年。本訳書からの引用，参照箇所は，（山口，22頁）のように本文中に示す。
- 4) （法國）約罕若克盧騷著『教育小説愛美耳鈔』（日本）山口小太郎，島崎恒五郎譯，（日本）中島端重譯，上海，教育世界出版所，[1903年]。本訳書からの引用，参照箇所は，（中島，第3冊，14丁右）のように本文中に示す。
- 5) *Rousseau's Emile, or Treatise on Education*, abridged, translated and annotated by William H. Payne, London, E. Arnold, 1892.
- 6) J.-J. Rousseau, *Emil oder ueber die Erziehung*, übersetzt von Hermann Denhardt, Leipzig, Reclams Universal-Bibliothek, 1877, 2 Bde.

- 7) 拙稿「日本における『エミール』の初期翻訳—山口小太郎・島崎恒五郎の抄訳（1899年）を読む—」, 永見文雄ほか編『ルソーと近代』風行社, 2014年, 399～409頁, 参照。
- 8) 佛國文豪ルッソ元著『児童教育論』, 文遊堂, 1897年。『父母と子供』, 文光堂, 1902年。拙稿「日本における『エミール』の初訳—菅學應の抄訳（1897年）を読む—」, 『立教大学教育学科年報』第56号, 2013年3月, 23-32頁, 参照。
- 9) ルッソー『人生教育エミール』, 隆文館, 1913年。拙稿「日本の近代化と『エミール』—三浦關造の抄訳を中心に—」, 『思想』No.1027, 岩波書店, 2009年11月, 194～207頁, 参照。
- 10) 中島一家にかかわる伝記情報は次を参照。中村光夫, 永上英廣, 郡司勝義（編）『中島敦研究』筑摩書房, 1978年, 316-392頁。『埼玉県教育史』第一巻, 埼玉県教育委員会, 1969年, 422-423頁。村山吉廣『撫山中島家蔵書目録』久喜市・鷺宮町両教育委員会合同調査報告書第一集, 1978年。同『中島撫山小伝』, 鷺宮町教育委員会調査報告書, 第二集, 1983年。同「中島敦とその家學」, 『中国古典研究』第22号, 早稲田大學中國古典研究會, 1977年, 107-130頁。同「同（續）」, 同誌, 第27号, 1982年, 69-85頁。同『評伝・中島敦一家学からの視点』中央公論社, 2002年。同「中島撫山小伝—撫山と中島家の人々」, 『中島撫山没後100年展』久喜市立郷土資料館, 2011年, 4-12頁。『中島撫山関係調査報告書（Ⅰ）』, 久喜市教育委員会, 2000年。勝又浩『中島敦の遍歴』, 筑摩書房, 2004年, 3-12頁。尹敏志「中島家三崎人伝」, 『书城』2018年9期, 59-68頁。なお、『中島敦全集』第一巻（筑摩書房, 1976年）の巻頭に、撫山、端蔵、竦之助の写真がある。
- 11) 『斗南先生』, 『中島敦全集』第一巻, 所収。藤村猛「『斗南先生』論」, 『安田女子大学紀要』第35号, 2007年, 29-40頁, 参照。
- 12) 刊行はどなく, 「現代支那の形勢及び中心人物の眞髓を看破するの甚だ尋常世人の見と異なるの多きあり」, 「論斷に信あり引證に據あり, 而して雄健の筆, 能く支那四州支那四億人を説破竭くす」と高く評価する書評が出た。『外交時評』1912年11月, 975頁。翌年には, 中島自身による漢文版も出版されている。中島端『支那分割之運命』弘文堂, 1913年。一方, 中国においては, 激しい論難が現れた。『支那分割之運命駁議』天津, 北洋法政学会, 1912年。この論難については次を参照。後藤延子「中島端『支那分割の運命』とその周辺（一）——アジア主義者の選択——」, 『信州大学人文科学論集』第39号, 2005年, 177-197頁。「同（二）」, 同誌, 第40号, 2006年, 123-144頁。李继华「北洋法政学子的激情反击—李大钊等人对中岛端《支那分割之运命》的“驳议”述评」, 『唐山学院学报』v.30 No.146, 2017年01期, 1-8頁。
- 13) （北美合衆國）查勒士德葛爾毛著『費爾巴爾圖派之教育』, （日本）中島端譯, 上海, 教育世界出版所, [1903年]。
- 14) シャルル・ド・ガルモー『ヘルバルト及び其學徒』（島崎恒五郎譯, 開發社, 1901（明治34）年）。
- 15) 羅振玉の伝記情報については, 自伝『集蓼編』（『羅雪堂先生全集』文華出版公司, 第5編第1冊, 所収, 1-46頁）に加えて, 次が重要である。陳邦直撰『羅振玉伝』（新京, 満日文化協会, 康德10年5月）, 莫榮宗「羅雪堂先生年譜」（『羅雪堂先生全集』初編第20冊, 所収, 8693-8757頁）。
- 16) 羅振玉「斗南存稟序」, 村山吉廣『評伝・中島敦』前掲, 所収, 145～151頁。
- 17) 蘇州師範學堂付設小学堂も蘇州市實驗小学となって存続している。實驗小学, 實驗中学は, 先進的なとりくみを促進すべく, 予算が重点配分される学校である。また, 江蘇省立第二師範学校も同様に改組を経て, 現在は上海中学となっている。
- 18) 日本語の他に算術, 代数, 幾何, 物理, 化学を講じる2年制の学校で, 開講時の学生は王国維, 陳胎範, 樊炳清, 沈紘, 吳爾易, 胡濬康, 薩端の7名, いずれも後に, 雑誌『農學報』, 『教育世界』にかかわった。次を参照。劉建雲『中国人の日本語学習史』學術出版会, 2005年, 100-102頁。薩山雅博「江蘇教育改革と藤田豊八」, 『国立教育研究所紀要』第115号, 1988年, 41頁。
- 19) 以下を参照。大川俊隆「上海時代の羅振玉—『農學報』を中心として」, 『國際都市上海』大阪産業大学産業研究所（産研叢書1）, 1995年9月, 181-260頁。錢鵬「羅振玉・王國維と明治日本學會との出会い—『農學報』・東文學社時代をめぐる—」, 『中國文學報』京都大學文學部中國語中國文學研究室, 第55冊, 1979年10月, 84～126頁。錢によれば, 『農學報』創刊に先立つ予告では日本語からの翻訳は, 英語やフランス語とはほぼ同じ比重で示されていたものの, 実際に出版された創刊号ではフランス語からの翻訳がなくなり, 英語と日

本語からの翻訳が半々であった(88-87頁)。

- 20) 中国国家図書館の蔵書目録をたよりに、これ以外に中島がかかわった訳業として、次の2点が確認できた。(奥地利) 埤斯弗韋力撰『埤氏實踐教育學』, (日本) 藤代禎輔譯, (日本) 中島端重譯, (清) 大學堂譯書分局譯, 北京, 大學堂官書局, 光緒 29 (1902) 年〔底本は、奥國ヴィン高等師範學校長ゲッテス氏原著『埤氏實踐教育學』, 藤代禎輔譯補, 博文館, 明治 27 (1894) 年〕。(法國) 波留撰『俄羅斯』, (日本) 林毅陸原譯, (日本) 中島端重譯, 上海, 商務印書館, 光緒 30 (1904) 年, 全 3 卷〔底本は、佛國學士會員アナートル, レルア, ポリユー著『露西亞帝国』, 鎌田榮吉, 有賀長雄閱, 林毅陸譯, 東京專門學校出版部, 明治 34 (1901) 年〕。中島は商務印書館でも無署名で文書を漢訳していたようであるが、こんにち、それらを同定することはきわめて困難である。
- 21) 巖明「蘇州の日本租界と近代都市の形成」, 『神奈川大学人文研究』第 149 集, 202-203 頁, 参照。なお, 上海に日本人居留民社会が形成されていく過程については次を参照。桂川光正「上海の日本人社会」, 『国際都市上海』大阪産業大学産業研究所(産研叢書 1), 1995 年 9 月, 29-97 頁。高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』, 研文出版, 2009 年。
- 22) 張之洞は『勸学篇』(光緒 24 [1898] 年) 下, 外篇遊学第二において, 中国の国力を高め, 中国の学問を存続させていくためには, 現状に鑑みて西洋の学問を学ぶ必要があるとはいえ, 中国の学問を理解してこれを礎とするのでなければ, 西洋の学問を知らないでいるよりも大きな災いとなるとした。後に「中体西用」(中学為体, 西学為用) 論と呼ばれることになる主張である(日本では「和魂洋才」, 朝鮮では「東道西器」など, 近代化の過程にあったアジア各地に, 自国文化の価値を再認識したうえで西洋文化を取り入れようする姿勢が認められる)。西洋人の教師につく利益には限りがあるが, 西洋の書籍を翻訳する利益には限りがないとはいえ, 西洋言語に精通した者が少ないために従来の中国語訳には誤訳が多いとして, 西洋書の日本語訳から中国語に訳す方が速やかで効果が^す高いとし, 若者の留学先とし日本を推奨した。もっとも, 同書には, 「^{たがや}舎己芸人」(「己の田を捨てて人の田を芸す」『孟子』尽心篇下) 日本人への手厳しい批判があることも見逃せない。同書は, 古来中国に伝わる本源を努めて人心を正すことを述べた「内篇」9 篇と, 変化に応じて中国の風気を自由に開放することを述べた「外篇」15 篇からなる。外篇「学制第四」には, 諸外国の学校が「専門之学」(高等教育機関) と「公共之学」(普通義務教育機関) に分かれていることを紹介し, 「設学第三」では, 前者に有為な人材を集めるためにも後者を充実させなければならないとした。次も参照。川尻文彦「『中体西用』論と『学戦』」『中国研究月報』第 558 号, 1994 年 8 月, 1-12 頁。汪婉『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院, 1998 年, 227-259 頁。
- 23) 羅の一行は, 高等師範学校, 女子高等師範学校, 東京府立師範学校, 高等工業学校, 市立女子職業学校などを見学し, 嘉納治五郎, 井澤修二, 杉浦重剛らと面会し, 助言を求めた。教育関係書目, 教科書(特に小学校用) も大量に入手し, 日本滞在中から翻訳を始めている。日本視察の成果は『扶桑両月記——附日本教育大旨・学制私意』(教育世界出版社, 光緒 28 [1902] 年) にまとめられた。日本では普通義務教育が普及している点, 儒教に基づいた修身を重視することで国粋を維持している点を井澤が強調したことに, 羅は特段の注意を向けたようである。次も参照。汪婉, 前掲書, 106, 112, 240-241 頁。呂順長「清末における羅振玉の日本視察と訪書活動」, 『文化共生学研究』, 第 17 号, 岡山大学大学院社会文化科学研究科, 2018 年 3 月, 20-32 頁。
- 24) 次を参照。錢鵬「青年時代の王國維と明治學術文化——『教育世界』雑誌をめぐる——」, 『日本中國學會報』第 48 集, 1996 年 10 月, 250 ~ 264 頁。錢鵬「羅振玉の教育論一斑——国民教育の普及をめぐる——」, 『書論』第 32 号(特集 羅振玉), 2001 年 3 月, 173-180 頁。蔭山雅博「教育専門誌『教育世界』の基礎的研究(1)——清末中国の教育近代化過程と文化情報——」, 『専修大学人文科学研究所月報』第 227 号, 2007 年 1 月, 21-24 頁。
- 25) 『教育世界』に訳出された法令の主だったものは, 次に原本の公布年月順に一覧表に整理されている。蔭山雅博「教育専門誌『教育世界』の基礎的研究(1)——清末中国の教育近代化過程と文化情報」, 『専修大学人文科学研究所月報』227 号, 2007 年 1 月, 13-17 頁。また, これと並んで訳出された師範学校向け教科書など

- の一覧は、同、19頁、参照。なお、同時期の江蘇省の教員月額俸給は、尋常小学で20～30元、高等小学で30～40元、中学で40～50元、専門課程で70～80元などで(蔭山雅博「清末江蘇省における『日本型』学校制度の導入過程」、『国立教育研究所紀要』第121号、1992年、13頁)、日本人教習の俸給が相対的に高額であったことがわかる。
- 26) このような事情は、時を置かずに日本でも紹介されていた。小谷栗村「清國蘇州學事」、『教育界』第4巻3号、1905(明治38)年1月、112-113頁、参照。
- 27) 蔭山雅博「清末江蘇省の教育改革と日本人教習」、『日本の教育史学』第31集、日本教育史学会、1988年、86頁、参照。
- 28) 蔭山雅博「江蘇教育改革と藤田豊八」、『国立教育研究所紀要』第115号、1988年、36頁、参照。
- 29) 『愛美耳鈔』の訳文・内容を検討する際に前提となる準備作業として、今後検証すべき課題が残されている。それは、中島が準備した訳文に、『教育世界』を創刊した羅振玉、後に雑誌の編集で中心的な役割を担った王国維などが、手を入れていたのか否か、という点である。『愛美耳鈔』が掲載された翌年の12月(甲辰第21期)に発行の『教育世界』第89号には、王国維による「法国教育大家盧騷傳」と題するルソー伝が掲載されている。その典拠同定作業も今後の課題である。
- 30) 日本語の影響が顕著な語彙が散見されるこの訳業の底本は、これまで確定されていなかったようである。筆者が検討した結果、かなり問題がある三浦關造の抄訳(注9、参照)に依拠した抄訳であることが確認された。巻頭、訳者による序に続いて掲載されている「盧梭略傳」は、固有名詞の英語表記、出来事があった時のルソーの年齢などの情報が補われている箇所があるものの、三浦訳の冒頭に掲げられたルソー伝の逐語訳である。本文の訳出箇所、訳文も三浦訳とはほぼ一致している。たとえば、「万物を造る者の手を離れるとき、すべては善であるが、人間の手にうつると、すべては損なわれる」という第一編冒頭の文は、「無論何物出於自然底創造都是好的一經人手就弄壞了」(一頁)と、原文にはない「自然」の語が補われている。当該箇所の三浦訳は、「何物でも自然という創造者の手から出て来る時は善いが、人の手に託されると悪くなる」(1頁)である。また、「貧乏な人には教育は必要ない」としたくだりに、三浦はペインの英語抄訳の脚注に依拠した「今や教育とは自由の異名である。自由は如何なる人もこれを獲得することの出来る権利である」という不適切な割注を付している(51頁)。魏の訳業でも、「此就從前法國底狀態而言現在則學制所定人人有受教育權利和義務所謂教育乃自由底別名不論何人有獲得自由底權利」(二十一頁)と、少し情報を補ったうえで、やはり割注として訳出されている。
- 31) 李浴洋「从“教育小说”到“学术名著”——晚清民国时期《爱弥儿》中译本研究」、『南京师范大学文学院学报』第1期、2018年3月、50-58頁。
- 32) 中国における『エミール』の初期受容の概要については、次が要を得ている。Li Ping-Oué, 《La fortune de l'Emile en Chine》, in Robert Thiéry éd., *Rousseau, l'Emile et la Révolution*, Paris : Universitas, 1992, pp.477-481. Wang Yao, 《J.-J. Rousseau et l'éducation moderne en Chine au tournant du vingtième siècle》, *Rousseau Studies*, no.3, Genève : Slatkine, 2015, pp.173-185.
- 33) 『社会契約論』の初期翻訳に関しては、次を参照。井田進也「明治初期『民約論』諸訳の比較検討」, 井田編『兆民をひらく——明治近代の「夢」を求めて』光芒社、2001年、116-156頁。Wang Xiaoling, *Jean-Jacques Rousseau en Chine, de 1871*, Musée J.-J. Rousseau-Montmorency, Siam, 2010. *Lumières*, n°30 (Dossiers : La circulation des textes politiques de Rousseau en Asie et dans les mondes arabe et turc), Presses Universitaires de Bordeaux, 2017.
- 34) 日本における『エミール』の初期翻訳、師範学校などで用いられた教科書、教育学者たちによって蓄積されてきた論評の難点については、さしあたり、次を参照。拙著『〈期待という病〉はいかにして不幸を招くのか——ルソー『エミール』を読み直す』, 現代書館、2018年、51-59頁。